



開物成務

令和5年 6月30日(金)発行

校長 津田 千由美

生き生き活動する姿

皆様ご存じのように、開成小学校は昨年度150周年を迎えました。昨年度発足した150周年記念事業実行委員会において、いろいろな事業の計画・実施がされてきました。その中の一つ、150周年記念式典が6月28日(水)3校時に行われました。「コロナ禍であっても実施できる子ども主体の式典」というコンセプトで計画してきました。

当初は6年生だけが参加し、5年生以下はリモートで視聴する予定でしたが、コロナが5類に移行されたことで、全校が集うことに変更し、プログラムの最後には、全校で校歌を斉唱する場面を盛り込みました。

6年生は、これまで総合的な学習の時間などを使い、開成小学校の150年の歴史を調べてパワーポイントにまとめたり、合奏練習に取り組んだりしてきました。

さて、迎えた当日。式の進行役も6年生です。

町長さん、議長さん、教育長さんからあたたかなお祝いの言葉をいただきました。「開成小150年のあゆみ」では、明治6年5月「益習館」という名前で開成小学校が始まったことや開成南小学校ができる前までは全校1,200人を超えるマンモス校であったことなどを、6年生が大変分かりやすく説明してくれました。途中にはクイズもあり、興味をもって話を最後まで聴くことができました。

その後、6年生による「ルパン3世」の合奏が披露されました。8分音符がたくさんあり、練習では、リズムを合わせることや一定の拍をとることに苦心していましたが、本番はみんなが適度な緊張感をもち、すてきな音色を響かせることができました。

最後は全員による校歌斉唱。来賓の皆様も一緒に参加していただき、「全校で歌える」という当たり前のことに幸せを感じるひと時でした。



全校による校歌斉唱

まさに子どもたちによる手作りの式典…最上級生として、6年生一人ひとりが自分の役割をしっかりと認識し、互いに声をかけあいながら主体的に取り組んだ成果が随所に現れていました。開成小学校の151年め以降を生きる1～5年生の子どもたちに、6年生からしっかりとバトンが渡されました。給食でも『150周年式典お祝い献立』が提供され、みんなで開成小学校150歳をお祝いする1日となりました。

*記念式典の詳細については、今後学校HP上でも写真入りで紹介する予定です。

6年生児童による発表 「開成小学校今と昔」



プログラム

- 1 はじめの言葉
- 2 校長のことば
- 3 教育委員会のことば
- 4 お祝いの言葉
 - ・開成町長
 - ・開成町議会議長
- 5 「開成小150年のあゆみ」発表
- 6 音楽発表
- 7 校歌斉唱
- 8 終わりのことば



「150周年記念式典 お祝い献立」
人参と大根で紅白のお祝いカラーかきたま汁には「お祝い」なるとプリンタルトのお祝いデザート

生き生き命～ミニトマト編～

2年生が生活科の学習でミニトマトを育てています。毎朝の水あげがすっかり定着しており、どのミニトマトも元気に育っています。今では、赤い実がずいぶんと見られるようになり、収穫の時期を迎えています。

先日、吉田島高校の村上先生をお招き、ミニトマトの育て方を教えていただきました。「水をあげるときのコツを教えてください、わきめがどれか教えてください、ありがとうございました。教えてくれたコツを生かしておいしいお野菜を作ります。これからいっぱいそだてます。」

「ミニトマトがたくさんになりました。ミニトマトがきらいだけれど、じぶんがそだてたミニトマトは食べられるといいです。」

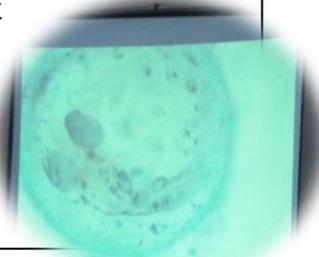
村上先生の教えにより、野菜への愛着がさらに膨らんでいます。



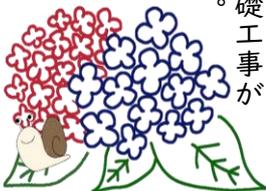
大切な命～黒めだか編～

6月26日(月)、5年生が理科の学習で、前校長の富川孝治先生を講師にお迎えし、メダカの学習を行いました。富川先生がご自宅で育てていらっしゃる黒メダカの5日めの受精卵を顕微鏡で見せてくださいました。目や背骨、心臓、血液の流れなどを確認し、こんなに小さな卵の中に、命がいっぱい詰まっていることに気づきました。卵の中のメダカがピクッと動くたびに、子どもたちは、メダカの力強い生命力を実感していました。

富川先生から、一人一つずつ黒メダカの卵をいただきました。黒メダカの親になった5年生は、毎日わくわくドキドキしながら顕微鏡をのぞき、受精卵の変化に驚きと喜びを感じています。生命の神秘さに触れることで、すべての生きものに対する命の重みを感じてくれることを期待しています。



ある日のこと、
「ママ見て、見て！」
「ママは忙しそうだから、ばあばでいいでしょ」
「やだ、ママ！ 見て、見て！ ほらできるでしょ！」
保育園で作ってもらった紙飛行機が、上手に飛ばせるようになった4歳の孫は、得意になってママを呼んでいます。こんなときは、誰もママに代わることができません。
またある日のこと、2年生が体育の授業で鉄棒をしていました。いろいろな技ができるようになった子どもたち。
「先生、見て、見て！ ほら、できるようになったでしょ」
やはり、同じように先生を呼ぶ姿がありました。あっちでも、こっちでも「先生、見て！」の声が上がリ、先生は大変そうです。でも、一人ひとりに「すごい！できたね」と、声をかけていました。
ある本にこんな言葉を見つけました。
子どもにとって本当の幸せとは何なのか。
それは、本来、子どもがもっている「できるようにになりたい」「分かるようになりたい」、あるいは「認められたい」といった欲求を叶えていくことに他ならない。
「分かるように」「できるように」「認めるように」とは、私たちが日々行っている教育そのものでもあります。一人ひとりの人生に対して、いかに責任ある仕事を任されているかを思い知らされる言葉です。
そして、この言葉は、私たちにもう一つ大切なことを伝えてくれます。発達の専門家によると、「ママ、見て」に代表される「こちを見て行動」は、「人間が生きていくうえで大事な基礎工事が終わっていませんよ」という合図でもあるのだそうです。
親と子の基本的信頼関係という「基礎工事」です。
「こちを見て行動」が見られる時には、己のことは一旦おき、子どもが望むように愛を傾ける必要があります。発達には順序があり、言葉でのしつけを叶えるために、まずこの「基礎工事」を大事にしたいものです。



わたしのひとりごと